

会長この一年

東京大学工学部 菊田惺志

この一年の務めのしめくくりがこのご報告です。はじめに学会活動の要としてご協力いただいた幹事の石川哲也氏(庶務), 磯山悟朗氏(会計), 浜谷望氏(編集), 尾嶋正治氏(行事), 古宮聡氏(渉外)と編集委員会, 行事委員会の方々のご尽力に感謝いたします。お蔭さまでこれまでと同様に学会活動を維持・発展させることができました。評議員会の皆様には学会の運営方針について適切にご判断を賜りました。事務局の西野三和子さんには学会設立時から引き続き献身的に支援していただいております。そのお蔭で学会はめりはりのある状態を保つことができています。

学会の主要な事業はご承知のように年会の開催と会誌の発行です。第6回年会は昨年(1992)の5月10, 11日に東京大学本郷キャンパスで開かれました。これは前年度の岩崎会長のもとで実行委員会(委員長: 太田俊明氏)において企画・実施されました。312名の参加者があり, とても盛況でした。特別企画では「化学と放射光」のテーマで化学の分野での放射光利用研究の現状と将来展望が議論されました。年会報告の詳細は会誌6巻2号61頁をご参照下さい。第7回年会は菅 滋正氏が実行委員長となり企画され, 本年5月11~13日に神戸市産業振興センターで開かれます。地元の兵庫県には後援をいただいております。各種の企画の中で例年と特に異なるのは, 「各施設のトピックス」の講演と「合同利用者シンポジウム」が立案されていることです。これは来年度に開催が予定されている放射光科学合同シンポジウムを先取りしている企画で, 所期の目的が達成されること

を期待しています。この年会では通例の2日間に続き, 3日目に特別に「アジア交流放射光フォーラム」が高輝度光科学研究センターと共催で開かれます。これは放射光科学の国際交流促進の一環として太田俊明氏が委員長の実行委員会において実施されるものです。アジア地域では放射光施設がすでに多数稼動しており, 建設中のところもあって, 放射光科学の盛んな地域に成長しつつあります。学会としては特にこのアジア地域との交流を視野に入れた活動を進めることが重要であると思っております。中国(北京, 合肥), 韓国(浦項), 台湾(新竹), インド(インドール), ロシア(ノボシビルスク)の各放射光施設とPFにビームラインをもつオーストラリアに招待講演を依頼し, 建設計画をもつタイからも招待することにしています。SOR-RING, PF, UVSORとSPring-8にも招待講演をお願いしています。フォーラムではアジア地域の放射光施設関係者から各施設の現状と将来展望を紹介していただく予定です。この企画がアジアにおける放射光科学の交流の第一ステップとしての役割を果たし, 将来的に研究交流が活発化することを期待しています。なおこのフォーラムの講演内容はプロシーディングスにまとめられます。それには国内の多数の小型放射光リングに関する概要説明も掲載されますので, 全体としてアジアの放射光施設の現況を概観し, 研究交流をめざすのに役立つものと思われま

す。会誌についてみますと, 編集委員会のご尽力により解説, トピックス, 実験技術の欄などに充実した記事が掲載され, 読みごたえのある雑誌とし

て好評を得ているのは喜ばしいことです。宮原恒
豆氏の執筆になる放射光基礎講座のシリーズのよ
うなものは教育的・啓蒙的な効果が大きく、今後
も同様な企画が望まれます。小型リングに関する
特集は小型リング関連の研究動向を知るうえでう
ってつけです。このような特集は特定の分野をい
ろいろな角度から深く掘り下げることができ、そ
の号はバックナンバーとしても人気がありますの
で、会誌の目玉のひとつになるでしょう。

講演会の開催も放射光科学の啓蒙活動として重
要で、行事委員会では「放射光フォーラム」を企
画・実施しました。平成4年度のマイクロマシン関
連の「放射光が拓くミクロの世界」に続き、平成
5年度には「界面の世界に“光”をあてる」という
テーマのもとに半導体表面・界面の放射光による
評価法からデバイス関連のトピックスまで含めて
6名の講師による講演が行なわれました。詳しく
は会誌7巻1号71頁に報告されています。

平成5年度は日本学術会議第16期会員候補者を
選定する年にあたりますので、そのための委員会
(石井武比古氏、岩崎 博氏、千川純一氏)をつく
り、選定を依頼しました。同委員会から学会とし
て石井武比古氏を会員候補者として推薦する旨の
提案があり、評議員会で承認されました。また推
薦人会議へ出席する推薦人として菅 滋正氏にお
願いすることになりました。

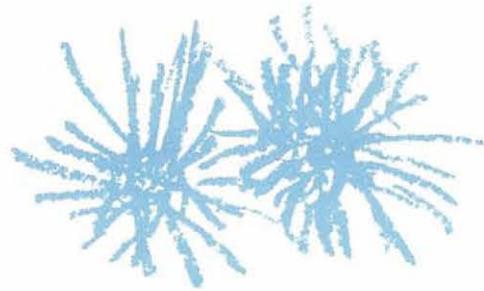
平成5年度には上述のような学会活動のほか
に、学会の運営体制や事業内容を見直す作業を行
ないました。学会は設立後5年を経過し、この間
会員各位のご尽力により順調に発展してきました
が、当初の枠組みを少し軌道修正してはどうかと
いう意見が聞かれるようになったからです。そこ
で大隅一政氏を委員長とする学会活動総合検討委
員会において検討をしていただきました。多くの
議論の結果まとめられた報告書が評議員会に提出
され、大筋が認められました。報告書は会誌の次
号に掲載される予定です。定款改訂が必要なもの
は第7回総会で承認を得て実施されることになり

ます。ここでいくつかの主要な変更点に触れたい
と思います。まず年会の見直しについてです。年
会と4放射光施設(SOR-RING, PF, UVSOR,
SPring-8)の成果報告会をまとめた形で「放射光
科学合同シンポジウム」が開かれることになりま
した。合同で開催しますと、全国の放射光関係者
が一堂に会して密度の濃い研究討論が期待できま
すし、個別に開く場合よりも放射光利用研究者・各
施設スタッフ間の情報交換や研究交流に資する
ところが大きいと思われまます。具体的な実施要領は
共催団体が集まった組織委員会で煮詰められます。
この合同シンポジウムが放射光科学の発展に大き
く貢献することを念じています。会誌については
現在年4冊発行されていますが、6冊発行へ向けた
検討が行なわれました。しかし資金面や実施面
での詰めが残っていますので、次年度に結論を出し
ていただくことになりました。組織については、
会長の任期を現行の1年から2年に長くし、じっ
くり腰を落ち着けて会務に携わっていただくこと、
評議員の再任までの期間を現行の1年間から2年間
に長くし、評議員の顔ぶれの固定化を避けること
などが変更点です。また若手会員の一層の飛躍を
期待して、優れた業績を挙げた若手会員を対象に
奨励賞を設けることになりました。これらの施策
は新年度の井口会長のもとで具体化されますの
で、会員の皆様のご理解・ご協力をお願いいたし
ます。

最後に放射光施設の将来計画についてですが、
SPring-8があと4年弱で利用研究が始まるのは喜
ばしいことです。TRISTAN-MRの放射光転用計
画がBファクトリーとのからみで立ちゆかなくな
ったのは残念ですが、来年の試用実験の機会を最
大限に生かすべきでしょう。一方、PFの高輝度
化、ARの専用化の方向は歓迎されるどころです。
また中型の高性能リング実現の見通しが立つこと
が強く望まれます。学会としても合意を形成して
積極的に支援していくべきでしょう。

ともあれこの1年間、気忙しいことでした。そ

の大半は自分で種を蒔いた結果のようなものですから自縄自縛で止むを得ません。せっかくですからいくつかの新しい試みが日本放射光学会および放射光科学の発展に対してプラスの効果をもたらすことを願って交代いたします。



1993年度幹事報告

庶務幹事この一年

東京大学工学部 石川 哲也

1993年度は、菊田会長のもと学会活動の再検討、国際交流の推進、各施設・利用者団体との合同シンポジウムの検討など、放射光学会の新しい発展を予感させるいくつかの活動が開始され、庶務幹事として微力ながらささやかなお手伝いをさせて頂きました。

しかしながら、いろいろと不手際も多く、会員の皆様に御迷惑をおかけしたのではないかと危惧しております。お詫びしなければならない第一点は、事務の合理化の一環として、Fax通信をはじめたのですが、会員数の多い機関への連絡時に非常に長時間に亘ってFaxを専有してしまったことです。おしかりを受けてみると、当然予想されたことであり、事前の検討の甘さは弁解の余地がありません。この点に関しましては、漸次改善を図ってまいりましたが、まだ完全なシステムになっていない点もございますので、会員の皆様方におかれましては、お気づきの点を是非、事務局ある

いは新幹事宛お知らせ頂けます様お願い申し上げます。

第二点は、評議員会を定員数不足で成立させ得なかった庶務幹事第2号となってしまったことです。皆様、超多忙な評議員の先生方のスケジュールの調整はかなり大変ですが、当方の楽観的期待が裏切られ、ご出席の評議員各位に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。また次期庶務幹事には、マーフィーの法則から「出席の返事を頂いても、出欠は確認しなければいけない」という項目を申し送ろうと考えております。

以上、何事にも至らない庶務幹事ではございましたが、1年間なんとか乗りきれたのは、西野さんをはじめとする事務局のご努力と、庶務以外の優秀な幹事諸氏のご努力の賜物です。誌面をお借りして御礼するとともに、放射光学会の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。